# “学びをひろげる わたしと○人の会”第 22 回研究会報告

## 特別の教科「道徳」について考える（つづき）

2017 年 9 月 2 日実施

前回に引き続いて特別の教科「道徳」について考えました。
今回は、山本卓雄、松井直哉、松森俊尚、堀智晴の 4 人のスタッフが、「私たちの道徳」（文科省発行）から教材を選び、「私なら、この教材を使って、こんな授業をする」という提案をすることから始めました。

15 分ずつの 4 人の提案をまとめることはできないので、各人がその「提案」を 1000 字程度に書くことにしました。研究会を終えて時間が経過した分、臨場感が減ってしまいますが、4 人の主張を読んでみてください。

１．山本卓雄

**「道徳の教科化」について**

研究会では、前回、道徳について考えようということで「道徳の模擬授業」から道徳について考えた。そして「道徳の教科化」になるまでの道徳の歴史をたどり、実施化の問題を論議した。日本が近代国家（明治）になるための教科（のちに検定教科書が作成される）を策定し、国家に必要な国民を養成することに進んでいった。「教育勅語」の作成で、戦争へ押し進んでいく国民を作りあげた。敗戦後、民主的な国民を目指し、「社会科」が出来、道徳は学校の全教育活動でおこなうものになったが、道徳の授業を週１時間やらなければいけない、道徳の年間計画を作成し提出しなければいけないとなり、戦前とよく似ている道をまた一歩一歩と進んでいった。

今、現場では「道徳とは何か？」「道徳の授業はどうする？」かの論議はなく、気づいたら教科書のような文科省の『私たちの道徳』が作成され、道徳の副読本と共に教師たちは、すでに授業を行っている。初任者指導を通して、初任者がちゃんと道徳の授業をしているかチェックもされている。新たに「検定教科書」になり、「教科化」になっても事態はあまり変わらないのかもしれない。でも、道徳と他の教科と決定的に違っているのは何だろうか。算数が出来ない、苦手だが、でも算数わからなくていいやと思う子どもたちはいる。道徳が出来ない、人に優しくない、誠実でない、そんな評価（たとえ記述でも）をしていいのだろうか。道徳（教科）が出来なくていい、そんなたくましい子どもたちは、少ない。先生の言葉がストレートに入っていく子どもには、つらいことだろう。

研究会では『私たちの道徳』がどんなものなのかよく見てみようとなった。道徳の指導要領では「自分で考えることが大切だ」といいながら、本の内容は、有名人は夢を持ってがんばってきた。みんなも夢を持とう。読み物教材は、道徳的価値観を学ぶように意図的に作成されている。『人とつながる』ところの「わかり合えること　支え合うこと」の標題に“相田みつを”の『めぐりあい』の詩がある。

あなたにめぐり/あえて/ほんとうに/よかった/ひとりでもいい/こころから/

そういってくれる/ひとがあれば

自分のことをわかってもらう、他人を理解することの難しさを理解し、考える教材としてこの教材はふさわしいのだろうか。今、ＳＮＳにある短い言葉、画像の「いいね！」という深く考えるのでなく、感じとって反応する社会であればあるほど、深く考える教材が必要だと思う。道徳的な規範も状況の中で変わっていくので、自分で考え行動出来る子ども、別の言葉で言えば、自分の中に道徳感を育てていく子どもを育てていくことが大切だと思う。どのように行動するか、もっと広く考えると、どう生きていくか考える、自分の中に倫理感を育てる子どもを育てる（そんなことを考えられる教材を子ども達に与えたい)。道徳の授業をおこなう教師は、いつも「道徳とは何か？」の問いを持ちながら、子どもと共に自分の中に倫理感を育てていく教師であってほしい。

２．松井直哉

**「道徳」という教科について（前回のまとめにかえて）**

前回の研究会で、私は「集団における役割と責任」という教材について、「この教材は集団の質はともかく、個人は集団に貢献せよと言っているとしか思えない。」と評した。

「道徳心」または「道徳的価値観」というものがあるなら、それが培われていく過程は、集団との関係を背景に自分の行動を決定していくこと、そしてその繰り返しで培っていくものだと思う。従って集団の質や、個と集団の関係抜きに論じられるべきものではない。

例えば家族が詐欺集団だったとして、そこに生まれ育てられた子は、「親の言うことを素直に聞くのがいい子」という道徳的価値観を当てはめて、せっせと見張り役をするのが正しいのか？私なら親の行為の意味が分かってくるに従って、親の指示には手を抜いたり、反発したりするだろう。

集団の質を問題にせず、「集団における役割と責任」と言われても、「集団の質を問題にするな」という意図が見え隠れしてしまう。それが日本という国がどの方向を向いているのかを問題にはせず、いわゆる単純な「愛国心」を植え付けて、上の言うことをきく人間を育てたいという意図を持っているとしか思えない。

一般的に、教材としてひとつの事例に接したとき、登場人物個人の判断や行動がどうなのかという観点のみで考えるべきではない。その個人と集団の関係、集団に対するその個人の評価などを含めて多角的に論じられるべきである。

教材としてのひとつの事例には、裏にある様々な背景や人間関係などは書き切れていない場合が多く、その部分はいろいろ想像ができる場合も多い。子どもたちはこれまでの人生を踏まえてその部分を想像する。従って子どもの答えが多様であることは当然で、それをひとつにまとめることに腐心するのではなく、様々な答えを導き出した子どもの裏にある一人一人の価値観やそれを導き出した背景に注目するべきだろう。それを交流することで個人が価値観を形成する一助とするのは良い。それをまとめて一般化しようとするなら、恐ろしさを感じる。

３．松森俊尚

（１）特別の教科「道徳」の特徴

①観念的な言葉による価値観の押し付け

「私たちの道徳」（小学校低・中・中学校版をみました）を開いてまず驚いたのは、「観念的な言葉」が氾濫していること。しかもその言葉にはどれも「価値観」が付与されている。たとえば低学年用の「もくじ」から拾うと、▼「きそく正しく気持ちのよい毎日を」▼「してはならないことがあるよ」▼「ともだちとなかよく」・・・といった具合に。

しかも「新学習指導要領」の「『道徳の内容』の学年段階・学校段階の一覧表」には、4つの内容（視点）について、それぞれに達成すべき目標が、小学校低学年、中学年、高学年、中学校の各段階で設定されて、実に9年間を展望した「道徳心」を身につけさせるための(押し付けるための)構造的なシラバスがつくられている。

②道徳の授業

▼考え議論する道徳　▼自主的で、主体的で、深い学び　が提唱されている。

③矛盾

①と②には大きな矛盾がある。

「決められた答え・価値観」に誘導する授業では、学習のエンジンは発動しない。到達目標と、進展が用意されたシラバスのもとでは学習のエンジンは発動しない。

この矛盾は、文科省内の政治的な駆け引き・綱引きの結果生まれたものなのか、全く意識されていないのかはわからないが。

（2）授業の提案

「私たちの道徳・中学校編」の『かけがえのない生命』を使って

▼「自分の生命、他人の生命」について考えたことを書き、発表し、交流する。→▼「出生前診断」について考えたことを書き、交流する。→▼「津久井やまゆり園事件」について考える。→▼「難病の乳児　尊厳死へ」の記事を読み合わせて考える。

その間に、生徒の発言やノートが課題となって、そちらに学習が向かっていくこともあり得る。むしろ生徒たちの問題追求に任せたい。

（3）まとめ

道徳の教科化によって「価値観の押し付け」が行われ、授業の自由さが奪われる危険性は大きいが、しかし一方で、すでに「できなくなっている」、「学びを生み出す授業をしてこなかった」現実があるのではないか。「道徳の教科化」がそれに追い打ちをかけてきたというのが実態ではないかと思う。

このままでは、▼教科書の35の教材を毎週1時間ずつ勉強する。▼教材を吟味したり、教科書以外から教材を投げ入れたり、時間数の弾力的な使い方などは考え付かない。▼与えられた教材を、与えられたやり方で、決められた時間で「教える」・・・といった、学校側、教員の側の「忖度」が道徳の教科化を推進するのではないかと危惧してしまう。

「今がチャンス」と考えられないか！

見方を変えれば、授業を変えるチャンスとできないか。

▼教員の主体性が問われている。

▼観念的な価値観を目標とするのではなく、事実を通して考える、学ぶ。

▼「自主的で、対話的で、深い学び」とは、子どもを育てる授業を求められていること。

▼教える授業から、子どもが学ぶ授業へ変えて行く。道徳だけではなく、他の教科の授業も変えて行く。

４．堀智晴

**「こうあるべきだ、とせまってくる」のに対応するのは、なかなか困難なのだ**

文部科学省発行の「私たちの道徳」の小学校５・６年の204頁に、「答えは一つじゃないよ」というタイトルで次のように書かれている。

道徳で考える問題は、答えが一つではないよ。自分では、「これでいい」って思っていても友だち

の考えを聞くと、そんな見方もあったんだと気づく。友達のことが、もっとよくわかったって思えることもある。
　だからーー。なぜ、どうして、と立ち止まって考えたり、別の見方を探してみたり、自分と違う立場の人の気持ちや考えを創造したりしてみよう。
　いろいろな考えを出し合って話し合おう。
　もっと大事なことに出会えるかも。
　みんなで道徳について話し合う時、大切にしてほしいこと。それは、一人一人が、安心して自由に自分の考えを出し合えるようにすること。でも、それって、簡単なことじゃない。「友達と話してよかった」と思える話し合いを創ろう。

　これを読むと一見その通りだと思ってしまいそう。特別な教科「道徳」のテキストには、このように一見正しいことしか書かれていない。この正しさに反発したり、文句を言うことがしにくい。
　安心して自由に自分の考えを出し合えるようにすること、これが大切だと書かれている。そうであるなら「道徳」の授業をすることをやめてほしい。これが、私の意見である。

　先日小学校の孫が 3 人来たのできいてみた。「道徳はたのしいか？」。3 人ともそろって「うん、たのしい」という。そうか。先生はこれまでのように正答を強いることなく、自分の意見を発言したりワークシートに書いたりしてほしいのだ。私は、先生の後ろに何かが隠れている、と思ってしまうのだ。

５．4 人の提案を受けて自由な話し合いになりました。いつものように、予定時間のぎりぎりまで意見交流が続きました。いくつかの意見を載せてみます。雰囲気だけでも伝わればと願います。
・今までは教科の中で、道徳(領域)を教えることになっていた。教科の中で道徳＝生き方＝学び方を学ぶのが学習。
・45 年前に受けた授業を思いだす。被差別部落の子どもが水汲みをする大変さ。事実を通した授業は忘れない。今実際に起こっている事実を題材にできないのか。
・教師の労働環境の厳しさが「赤本」を頼りにさせる。
・教科化は始まるので、「知らない」とはいえない。どう対抗していくのか。
・人権教育の歴史を通して教材の吟味、教材づくり、授業づくりに取り組む。
・本気でやろうと思ったら、むしろ今まで以上にやれる。
・1 年間「東日本大震災」を題材にした道徳の授業をしたという話をめぐって、これからはそんな授業ができるのか。時間の弾力性、教科書を使わない、教員の主体性。